事例４

キーワード：「趣味の活用」「仲間づくり」「夫婦で活動」「市民交流サロン」

夫婦二人三脚で作り上げた市民のための交流サロン

活動地域（宮城県塩竈市）

男性のプロフィール

氏　　名：佐藤　亨さん　　年齢層：高齢者層（60 歳以上）

活動概要：公民館の視聴覚室を借り、ジャズを聞きながら本格的なコーヒーを楽しめる市民のための交流サロンとして「Saturday Jazz Cafe」を 5～10 月の期間限定で開催。平成 23 年 9 月に開催 100 回を迎えた。

活動開始のきっかけ

本場アメリカのジャズに触れて、老後はジャズ三昧を楽しむことを決意

現役のころから、退職したら何か地域活動をしたいと考えており、自分に何ができるかを模索していました。そんなとき、業界視察でアメリカに行くこととなり、憧れていた本場のジャズ・クラブへ行き、本物のジャズを堪能しました。昔からジャズが好きだったのですが、30 代のころは仕事に没頭し、ジャズから一度離れていましたが、本場のジャズに触れたことで、再びジャズへの思いが膨らみ、ＣＤや機材集めを始めました。そして、妻と話し合って、60 歳からはジャズ三昧で楽しく生きていくことを決めました。

そのころ、私は自治会長を務めており、公民館まつりで「公民館料理教室」の試食会があったので、その飲食コーナーで大好きなジャズを流しました。これを見た公民館の副館長から、「市民ボランティアとしてジャズ講座を開いてほしい」と依頼を受けました。地域活動をしたいという気持ちがあったので、これを受け入れ、平成 15 年 5～10 月までの期間限定で「ジャズ講座」を企画し、実施したのです。

このときは、ジャズ講座をその後も続けるつもりはなかったのですが、ジャズ講座に参加した方が公民館の機関紙に投稿した記事「至福のひと時だった」を見て、翌年からは、自らの主催で、公民館の視聴覚室を借りて、「Saturday Jazz Cafe」をやることを決めました。そして、「自分一人ではなく、妻と一緒にやれば、もっと気楽にジャズを聴いてもらえる雰囲気が作れるのではないか」と思い、夫婦で Cafe を開くことにしたのです。妻も「手伝うからには頑張る」と意気込んでくれました。

活動の内容

ジャズを知らない人でも楽しめる、癒しの空間を夫婦でつくる

「Saturday Jazz Cafe」の目的は、市民のための交流サロンです。ジャズの好きな人たちだけでなく、ジャズを知らない一般市民の方々にも楽しんでもらえるように、親しみやすいスタンダードなものを選曲するようにしています。また、解説を織り交ぜながら、演奏の聞き比べなども行っています。

妻は、「自由でおしゃれなナイトクラブのような空間を作りたい」と、会場作りに力を入れ始めました。手作りスタンドや手作りの花を会場に飾ったり、回ごとに産地を変えた本格的なコーヒーを参加者にふるまったりと、毎回、工夫を凝らしてくれます。味気ない視聴覚室が、妻の手で、見事なナイトクラブ風の空間に変化します。

参加する方々が自由に交流のできる空間にしたいので、会員制とせず、誰でも自由に参加できる仕組みにしています。

◇「Saturday Jazz Cafe」の概要◇

開　催：5 月～10 月
営　業：第一・第三土曜日
　　午前 10 時～12 時
参加費：300 円

活動のやりがい

参加者との間に育まれていた“絆”

我が家は、東日本大震災で大規模半壊し、私たち夫婦は、市役所や友人宅で避難生活を送っていました。その後、自宅に戻り、自立して生活していこうとしたとき、「Saturday Jazz Cafe」に来てくれていた方たちが、ストーブを持ってきてくれたり、生活用品などを援助してくれたりと、温かい支援を受けました。

自宅を訪ねてくれた方たち自身も同じく被災された方でしたが、長く Cafe をやってきたことで、参加者と我々夫婦との間に“絆”が育まれていたんだと実感しました。本当に嬉しく思っています。

周囲との関わり

二人で始めた Cafe が、みんなの Cafe に

「Saturday Jazz Cafe」を続けていく中で、常連の方がサポーターとして、Cafe の準備などを早朝から手伝ってくれるようになりました。会場を飾るために、手作りの花を持ってきてくれる方、手作りのお菓子を持ってきてくれる方など、集まる皆さんが Cafe を大切に思ってくれ、参加者が楽しめるように盛り上げてくれます。参加者の方が、Cafe の様子を撮影し、番組に投稿し、ローカル番組で紹介されたこともありました。Cafe の営業終了時には、参加者全員が後片付けを手伝ってくれています。

二人で始めた Cafe ですが、今では、参加者全員がサポートしてくれる Cafe になったと感じています。

直面した課題と解決方法

Cafe の期間以外にも、活動の場を広げる

Cafe の開催は 5～10 月限定で行っているため、「それ以外の期間にも何かできることはないか」、また、参加者から「何かをやってほしい」との声をいただき、「Men's Club」を設立しました。その内容は、“仙台の一流ホテルでの昼食会とジャズ・クラブを借り切っての新年会”、“紅茶専科店での紅茶の味比べとジャズライブ”、“日本酒ウンチク講座”など、多彩な内容です。開催日は、イチニイサン（1 月 23 日）、ニイニッサン（2 月 23 日）、サンニッサン（3 月 23 日）と覚えやすい日程としています。

このように、Cafe の休み期間となる時期に交流の場を充実させることによって、皆さんに、さらに楽しんでもらえるようになりました。また、交流を深める上でも効果を発揮しているのではないかと思います。

これからの展望

「Saturday Jazz Cafe」を通じて、交流の輪をもっと広げたい

Cafe に参加される方々の中には、様々な才能を持った方がいらっしゃいます。最近では、そうした方々が Cafe で発表するようになってきました。例えば、写真や手芸などです。Cafe が参加者の皆様の才能を表現する場として利用され、交流の輪をさらに広げていくことに役立っていければと思っています。

妻がいたからこそ、約 10 年にわたって、Cafe を持続できたと思います。また、夫婦で活動をしているためか、参加者の中にも夫婦で訪れる方が多くなっています。ときどき、妻と「いつまで続けていこうか」という話をすることもありますが、皆さんからの励ましや「続けてほしい」という声が嬉しくて、今までやってきました。そうした方々の気持ちを裏切らないよう、これからも、妻と一緒に、できる限り続けていこうと思っています。

事例５

キーワード：「活動拠点」「退職世代の交流」「技能の活用」「サークル設立」

地域の高齢仲間と楽しみながら凧や竹細工を創作

活動地域（山形県山形市）

男性のプロフィール

氏　　名：海和　昌蔵さん　　年齢層：高齢者層（60 歳以上）

活動概要：地域の高齢男性らと「出羽凧クラブ」を結成し、凧、竹細工などの製作活動を行っている。そのための活動拠点として、自宅の一部を作業小屋として開放し、交流を図っている。

活動開始のきっかけ

山形の北はずれ。子どもたちの遊び場を親父たちでつくったのが最初のきっかけ

昭和 38 年ごろ、私を含めて、何名かのお父さん世代が婿養子として、他の地域から山形の北はずれにあるこのまちへやってきました。私たちは顔合わせのために、「石ころ会」と名づけた活動組織を作り、互いの交流を図るとともに、何か地域のためにできることはないかと話し合いました。ちょうどこのころ、地域に遊園地や公園などがなく、子どもたちの遊び場がなかったことから、遊び場を作ることを思いつき、付近を流れる川の旧堤防と新堤防の間の遊水地に、お金をかけずに、桜の木などの苗木を植えたり、鉄棒やタイヤを配置したりして、子どもたちの遊び場を手作りで完成させました。この遊び場は、昭和 60 年ごろ、市の管理に移行し、現在も「桜公園」として子どもたちに利用されています。

そして、30 年の時が過ぎて、退職を機に、「石ころ会」の元メンバーをはじめ、地域の高齢男性で集まり、地域の問題について話し合いました。「子どもたちを外で元気に遊ばせたいね」と話し合っていたとき、私が中国の友人から土産でたまたま凧をもらいました。「凧なら子どもたちも外で元気に遊べる」という話になり、メンバーの中に凧作りの経験者がいたわけではありませんが、中国の凧をモデルに凧作りを始めることにしました。ただし、製作はスムーズには進まず、飛ぶものができるまでに 3 年を要しました。凧を製作するにあたっては、作業場が必要となるため、私の自宅の一部を作業小屋として同世代に開放し、「出羽凧クラブ」を結成しました。それからはこの小屋が私たちの活動拠点となりました。

活動の内容

仲間と創意工夫しながら凧、竹細工などを製作

気心の知れた隣近所の同世代仲間が作業小屋に集まり、凧や竹細工を作りながら交流しています。凧の材料となる竹は周囲に協力を働きかけたところ、無償で譲り受けることができています。そのお返しとして我々が作った竹細工を差し上げています。

凧作りに関しては、毎年、学校側から依頼があり、文化祭に凧作りのブースを設けて、凧の作り方を指導しています。竹を竹ひご状にして、糸巻きなども竹で成型するため、人数分を準備するのに丸 2 日かかります。子どもたちも自分で作ることで興味が生まれるようで、完成した凧を外で楽しそうにあげています。

凧作りに使用できる竹は枝の出ていない部分に限られますが、枝の出ている部分も有効活用したかったので、余った竹で小物入れやキャラクター小物を製作し、敬老会などに配布しています。

作業小屋の風景

キャラクター小物の一例

活動のやりがい

メンバー一人ひとりが活動の楽しさを満喫

●夫婦一緒にいることがけんかの元。夫も妻もそれぞれ趣味を楽しんでいるので、良好な夫婦関係が築かれています。
●友達の顔を見るのが楽しい。気晴らしにもなります。
●言いたいことを気兼ねなく言いあえるので心地の良い居場所になっています。
●みんなの顔を見ると明るくなってきます。作業小屋は、「出羽凧クラブ」のメンバーに限らず、近所の方々の憩いの場になっています。

※作業小屋に集まったメンバーの一部の声を掲載しています

周囲との関わり

妻や敬老会の高齢者、地元の中学生など、幅広い人々との関わり

作業小屋と「出羽凧クラブ」はお父さんのために作ったものですが、竹下駄の鼻緒付けなどではお母さんにも協力してもらっています。家族の理解と協力が得られてきたことには感謝しています。

また、老人ホームなどに竹下駄を持っていくと、同年代の方々が懐かしさから「自分たちも作りたい」と言って、製作を手伝ってくれることがあります。凧作りをきっかけに、地域の子どもたちと交流する機会もできました。さらに、作業小屋は、近所の人の近況や地域の出来事などを情報交換する場にもなっており、そこから新たな交流が生まれることもあります。

このように、我々の活動は妻や地域の高齢者、子どもなど、幅広い人々との交流につながっています。

活動で心がけていること

目標は、外で元気に遊ぶ子どもを育てること

最近、「子どもの安全性」が強く言われ、小刀や彫刻刀を持たせないなど、危ないことをさせない教育がとられています。今の子どもたちは、雪合戦でも手袋をつけていますが、それでは硬い玉を作ることはできません。素手でやるから硬い玉ができ、当たると痛く、だから当たらないように真剣に逃げて遊ぶようになります。その真剣さが今は感じられないため、我々が子どもたちに教える遊びの中には、「ちょっとした危なさ」を取り入れるようにしています。

例えば、こうぞの木の枝から鉛筆を作ったり、鉛筆を小刀で削ったりする体験をさせています。外で元気に遊ぶ子どもを育成することは、我々の「石ころ会」のころからの変わることのない目標なので、その実現のために日々試行錯誤して取り組んでいます。

これからの展望

喜んでいる方がいる限り、作業小屋での創作活動を継続

作業小屋は自由に出入りできる場なので、誰かがいないと何かが回らないということもないし、来なくて困ることもないし、来てもらって困ることもない。堅苦しいルールがないから、途切れることなく人が集まり、長年、この作業小屋での活動が続いているのだと思います。

凧、竹細工の材料の調達においても、周囲の協力が得られているので、それほど費用はかからず、費用面での心配もありません。また、製作したものを販売することなく、欲得なしでやってきました。こうしたやり方だからこそ、息の長い活動ができていると思っています。

我々が作ったものを喜んでもらってくれる方がいる限り、メンバーともども作業小屋での活動を続けていく思いでいます。

事例６

キーワード：「子育て支援」「スポーツ」「趣味の活用」「父親同士の交流」「チームで活動」

野球がつなぐ、家族、地域の絆づくり

活動地域（群馬県みどり市）

男性のプロフィール

氏　　名：星野　輝幸さん　　年齢層：若年層（20～30 歳代）

活動概要：市スポーツ少年団単位団に認定員指導者登録し、週 4 回の練習のほか、大会や練習試合などで子どもたちを引率し、野球指導をしている。

活動開始のきっかけ

社会人野球チームのコーチからの誘いがきっかけ

もともと私自身、小学生のころから野球を続けており、現在でも社会人の野球チームを作って試合を楽しむほどの野球好きです。また、息子も私の姿を見てなのか、野球に関心を持ちはじめ、地元の少年野球チームに入部しました。

ちょうど私が所属している社会人野球チームの先輩が、私の息子が所属した少年野球チームのコーチでもあったので、私たち親同士が互いに顔見知りであったことから、少年野球チームの手伝いを頼まれたのがきっかけです。野球が好きですし、野球指導にも関心があったので、先輩からの依頼を快く引き受けました。

その後、私は、市スポーツ少年団単位団に認定員指導者登録をし、そこで講習を受けて、野球指導に関わるようになりました。

活動の内容

野球指導、子どもと父兄との交流をサポート

週 4 回、平日は火曜、木曜日の 16 時～19 時半まで、土日祝日は 9 時～17 時まで野球指導を手伝っています。平日は仕事が終わるのが 17 時なので、17 時半ごろからチームに加わっています。

監督・コーチとは別に、ランニングや体操、キャッチボール、ノック、バッティング練習の指導の手伝いやアドバイスを行い、地域の子どもたちの成長をサポートしています。練習試合では、審判を務めることもあります。

少年野球チームには 1 年生から 6 年生までおり、その中には自分の子どももいるわけですが、チームでの練習のときには自分の子どもに特に声をかけることはせず、他の子どもたちと同じように指導しています。子どもたちに野球を好きになってもらいたいという一心で、時に厳しく、時に冗談を織り交ぜながら指導しています。

また、子どもと父兄の交流を促進させるために、バーベキュー大会やボーリング大会、旅行などを企画し、実行しています。

活動のやりがい

子どもたちの成長を見られることが喜び

大会や練習試合、試合においてミスが起きたときには、子どもたちのモチベーションが下がります。このようなときには、そのミスを反省し、次の試合に生かすように指導し、モチベーションの維持と、子どもたちの成長につなげるように心がけています。

子どもたちを技術面だけでなく、メンタル面からもサポートすることに留意してきましたが、その成果として、引っ込み思案だった子が積極的になったり、自己中心的だった子が、気が利くようになったりと、一人ひとりに成長が見られるようになりました。こうした成長を近くで見られることに喜びを感じています。

周囲との関わり

家族間、地域間のつながりが深まりつつある

息子が野球を始めるようになって、祖父と息子がキャッチボールをしたり、祖母が息子におやつを作ってくれたりと、祖父母と子どもが触れ合う機会が増えました。また、野球の試合のときには祖父母も応援してくれ、家族の絆が深まってきているように感じます。

さらに、野球の練習をしていると、地域の高齢者が話しかけてきて、そこで孫の話をし始めたりすることがあります。子どもたちも高齢者の話に耳を傾けますので、世代を超えた交流がそこで生まれているのを感じます。

野球チームの存在が家族や地域の接着剤的な役割を果たし、家族間、そして地域間で会話やつながりを生み出していることは、非常に良いことであると感じています。

さらに、野球の練習や試合に参加するようになってから、他の保護者との交流が図られ、野球以外の地域活動がスムーズに進むようになっています。野球を通じて交流を深めていくことは、地域の絆を深めることにもつながっていると思います。

直面した課題と解決方法

仕事との両立は、職場のみんなでフォロー

人口が少ない地域であるため、地域の野球指導に限らず、子ども育成会や体育振興会などの地域行事に、男性が多数参加しています。このような土地柄からなのか、我々よりも年齢の高い世代も、今の我々と同じように、地域活動と仕事の両立に苦労してきた方ばかりです。

このため、職場においても、上司や同僚は、私が野球指導を行っていることについて理解を示しており、困った時にはお互い様の精神でフォローし合える良好な関係ができています。

これからの展望

地域に野球を根付かせていきたい

子どもたちが野球を楽しめる環境を整えてあげることが、我々大人の役割であると思っています。しかし、当面の課題は、少年野球チームに入部する子どもたちを確保することです。少子化によって、小学校の児童数が減ってきており、最近では入部者が少なくなってきているため、試合に 2 年生が出場することもあります。

自分の子どもが小学校を卒業しても、できる範囲で野球指導に関わっていきたいと考えています。そして、地域に野球を根付かせていきたいと思います。自分自身も、野球を通じて交友関係が大きく広がりました。野球の楽しさと、野球から学べることを地域の子どもたちに伝えていきたいと思います。

事例７

キーワード：「子育て支援」「父親同士の交流」「ＰＴＡ」「既存団体で活動」

ＰＴＡ・おやじの会に属し、地域の子どもたちを育成

活動地域（埼玉県蕨市）

男性のプロフィール

氏　　名：新妻　浩明さん　　年齢層：中高年層（40～50 歳代）

活動概要：ＰＴＡ会長、おやじ会メンバーとして地域行事に関わるなかで、活動の幅をさらに広げ、子どものドッジボール指導なども実践している。

活動開始のきっかけ

おやじの会の活動に関心を持ち、入会したのが始まり

今から 10 年ほど前、私たち家族はもともと蕨市出身ではなく、他の地域からこのまちに来たため、子どもが小学校に上がったとき、地域とのつながりがないことに問題意識を感じていました。

妻は、私よりも先に行動を起こし、子どもたちが自由に、自分たちの責任で遊ぶ場としてプレーパークづくりを始め、平成 18 年に外遊びを考える会「どろんこの王様」を結成し、地域活動を実践していました。私もその活動をサポートする立場で関わっていましたが、自分自身は、「お父さん同士の地域のネットワークが作りたい」と考えていました。ちょうどそのころ、地元の「おやじの会」という組織が、学校のペンキ塗りや運動会の手伝いをやっていることを知り、「それを手伝ってみたい」という興味と、「お父さん同士のネットワークができるかもしれない」という期待から、平成 19 年に入会することを決意しました。

おやじの会に入会したことで、ボランティア活動や地域交流の輪がどんどん広がっていったので、私にとって、おやじの会への入会が本格的に地域活動に関わるようになるきっかけであったと思います。

こうした活動を実践してきたこともあってか、学校のＰＴＡ会長に推挙され、ＰＴＡ会長としても地域活動に関わるようになりました。

活動の内容

子どもたちと関わる様々な地域活動を実践

「おやじの会」として、「田んぼの学校」にスタッフとして参加しています。田んぼの学校は市制施行 50 周年記念事業として平成 21 年に始まったもので、子どもたちが収穫の喜びを体験することを目的としたものです。私自身、泥遊びへのあこがれもあって、子どもたちとともに、自分も楽しみながら活動を実践しています。

子ども会のドッジボール大会では、子どもたちをボランティアで指導する役を引き受けました。小学校高学年の寄せ集めのチームながら市大会で優勝。県大会に出場できたことは、子どもたちにとっても良い経験になったと感じています。

◇これまでに関わった主な取り組み◇

- ○ＰＴＡ行事全般
- ○小学生が公民館で共同生活を送る「合宿通学」に実行委員として参加
- ○「田んぼの学校」にスタッフとして参加
- ○子ども会の「ドッジボール大会」にコーチの一人として参加
- ○プレーパークの手伝い　等

活動のやりがい

活動を互いに評価しあうとき、やりがいを感じる

私は肩ひじはらずに、地域活動に取り組んでいますが、節目、節目で「今年は良くできたね」と、周りのお父さんたちと声をかけ合うとき、「やってきて良かったな」と感じます。

お父さんたちと、同じ方向に向かって力を合わせて取り組むと、職場では体験できないほど大変盛り上がります。こうした経験が良い意味でクセになります。

男女共同参画という面からいえば、ＰＴＡは今なお女性の参加が多いのが現状です。しかし、様々な組織間の調整を担ったりする上で、会社組織で生きてきたノウハウが生かせることもあり、男性も大きな役割を果たすことができるのではないかと感じています。

周囲との関わり

地域の先輩方は本当に頼りなる存在

おやじの会のメンバーは、歴代のＰＴＡ会長などの先輩方が多いのですが、総会などの場で、彼らから教えを受けることが多々あります。町会との関わりや地域のイベントのやり方などについてアドバイスを受けられるのは本当にありがたいと思います。ベテランのお父さんたちとの横の連携ができていると、地域活動も非常にやりやすくなります。地域活動を進める上で、本当に頼りになる存在です。

直面した課題と解決方法

若いお父さんたちを巻き込んでいくことが課題

地域活動に若いお父さんが参加しないのは、とても寂しく思います。おやじの会のメンバーも、ＰＴＡのＯＢが中心となっています。やはり、同じ顔ぶれで活動を続けていくよりも、現役のお父さんたちに入ってもらった方が、会としても、子どもたちにとっても良いのではないかと思います。

私は、おやじの会の中で、先輩方と若いお父さん方のちょうど中間に位置し、双方の間を取り持つ立場にいると思っています。このため、つなぎ役として積極的に声かけをして、おやじの会に、若いお父さんが入りやすくなるように心がけています。その結果、徐々にではありますが、若いお父さんが加入し始めています。なかには、会に属することを好まない人もいますが、おやじの会への加入にかかわらず、イベントのたびにお手伝い依頼の声をかけ、お父さんたちの輪を広げることを意識しています。

これからの展望

現役の今こそ、子どもたちと関わる活動を大切にしたい

地域活動に参加することで、地域の課題が見えてきますし、それを克服することで、より子どもたちが健やかに暮らせるまちができると思います。現在、ＰＴＡ会長を務めて３年目になりましたが、いずれ役を降りても、地域活動は続けていきたいと考えています。少なくとも自分の子どもが学校に通っている間は続けたいと思います。

現役時代に地元との付き合いや学校との関わりを作っておくと、これからの人生の様々な場面で生かされてくると思います。子どもが学校に通う現役世代の今こそ、地域活動を始める意義は大きいという思いでいます。

事例８

キーワード：「子育て支援」「仲間づくり」「新規団体設立」「行政との連携」「イベント」

子どもたちを笑顔にするためイベントに出動

活動地域（埼玉県戸田市）

男性のプロフィール

氏　　名：竹田　繁紀さん　　年齢層：中高年層（40～50 歳代）

活動概要：埼京戦隊ドテレンジャーのメンバーとして、子どもたちの健全育成を目的とした同団体の活動に関わる。平成 23 年 4 月から代表を務めている。

活動開始のきっかけ

子どもの笑顔が見たくてメンバー募集に応募

私が、現在居住する戸田市に来たのは第一子である長男が生まれた翌月なので、今から 10 年前になります。私たち夫婦はともに地方出身者ですが、3 人の子どもたちにとってはこの町が地元になります。子どもたちのためにも地域社会とのつながりを作りたいという思いはあったのですが、これといったきっかけがないまま 5～6 年の年月が過ぎました。

そのようなとき、市の広報に掲載されていた「埼京戦隊ドテレンジャーメンバー募集」の記事を目にしたのです。10 代のころに着ぐるみショーでアルバイトをしたことがあり、その時の経験が楽しかったことと、学生時代、また、自衛官時代に空手をしていたので、アクションシーンに対応できること、そして、子ども好きだったことなどの理由から、メンバーの一員となりました。

活動を始めたきっかけは、「世のため人のため」というよりは、「自分自身や家族のため」に地域社会とのつながりをつくることであったと思います。そして、自分たちが楽しみながらする行いが人様のお役に立てるならば、こんな良いことはないと感じたのです。

当初はただの一メンバーで、責任もなく、自分の予定を優先しながら、気楽に、楽しく活動していました。しかし、中心で指揮をとっていた事務局長が遠方に転居することになり、平成 22 年の春から、私は後任を任され、グループを統括する立場となりました。メンバーだけでなく、依頼者や自治体それぞれの利害を調整し、なおかつ中長期的視野でグループ活動を展開していかなくてはなりません。やりがいはありますが、責任とプレッシャーも強く感じました。

活動の内容

子どもたちを喜ばせるため、幼児対象のヒーローショーをメインに活動

我々、埼京戦隊ドテレンジャーは、平成 14 年から、戸田市内の幼児を対象としたヒーローショーをメインに活動しています。子どものころに憧れたＴＶヒーローになって自分たち大人が楽しむというよりは、子どもたちに喜んでもらうことが目的です。我々はスポンサーやバックアップの組織を持たず、純粋な有志が活動しています。

活動数は年々増え、近年では年間 15～20 回程度のショーを実施しています。特に、夏祭り・秋のイベントシーズン・クリスマスなどには依頼が多く来ます。ショーでは、子どもたちに楽しんでもらうと同時に、「イジメ撲滅」、「早寝早起き」、「交通安全」などのメッセージも送るようにしています。また、グループキャラクターの知名度が向上してからは、地域のお祭りの盛り上げ役をするなど町おこし的な活動も増えてきました。

活動のやりがい

地域貢献の実感、周りからの応援が喜び

地域の中で自分たちがオンリーワンの存在として役立っていると感じられることは大きな喜びです。友人・知人も増え、応援してくれる方がたくさんいることも喜びの１つです。

地域活動に初めて飛び込むときには、誰もが不安を感じると思います。しかし、どんなことでも行動を起こす以上、リスクはつきものです。また、活動を始めても、周囲の人たちに受け入れてもらえるまでには多少の時間がかかります。その間、時には不快な思いをすることもあるかもしれません。しかし、それは何かを始める上で避けては通れない道ですし、それを嫌がっていては何もできないと思います。

私の経験を通していえることは、とにかく一度参加してみて、「自分に合いそうだ」という感触があれば、「1 年間は下積み期間」という気持ちでスタートしてみるのがよいと思います。チャレンジしてみる価値は大きいと思います。

周囲との関わり

「ヒーロー」というテーマから、家族ぐるみで活動がしやすい

妻は活動に協力的で、子どもたちもヒーローが大好きな年頃なので、常に家族そろっての活動となっています。友人も何人か勧誘した結果、活動に協力してくれています。

また、自治体とは様々な面で良好な関係にあると思います。市から活動をサポートする補助金が 2 年にわたり認められ、備品や機器、グッズやプレゼント商品などの充実を図ることもできました。また、メンバー募集の声かけや広告などの面でも自治体の協力・支援が得られています。

直面した課題と解決方法

とにかく働きかけることでメンバー不足を解消

慢性的なメンバー不足は、常に悩みの種です。一定の人数を必要とする活動内容だからです。以前は依頼予定日の参加状況が悪ければ依頼をお断りしていましたが、最近では断れない状況も多々あり、悩みの種となっています。地道な声かけや広報誌の募集記事掲載など、同じことの繰り返しとなりますが、とにかく働きかけること、これしかないと考えています。

また、人間関係におけるトラブルも何度か発生しています。メンバーによって意欲に温度差があることや考え方の相違など、様々な理由から活動から去っていくメンバーもいますが、ある程度は仕方がないと考えています。ただ、ボランティアとはいえグループを預かるリーダーは、明確な一定の方向性を示す必要があると思います。また、何かを決断するときは色々な意見があるため、全員を満足させることはできませんが、時には非難を受けても自らの信念に従って、行動することが必要と考えています。

これからの展望

10 年後も今と同等以上のレベルで活動を継続していく

我々の活動はすでに地域社会において、一定の役割と責任を担っていると受け止めております。今後は長期的なビジョンを持ち、「活動」と「キャラクター（ブランド）」を継承していくシステムを作ることや後継者の育成などを目指し、その責任を果たしていきたいと考えています。

現在の目標を一言でいえば、「子どもたちに喜んでもらいながら、10 年後も今と同等以上のレベルで活動を継続していること」です。

事例９

キーワード：「食育」「仲間づくり」「技能の活用」「新規団体設立」「行政との連携」

マーマレード作りを通して、地域交流を活発化

活動地域（東京都杉並区）

男性のプロフィール

氏　　名：太田　信司さん　　年齢層：高齢者層（60 歳以上）

活動概要：民家などで利用されていない果実（夏みかん）をマーマレードにして、地域交流や食育に取り組む。マーマレードは障害者就労支援センターでパンやケーキに使用され、販売されている。すぎなみ大人塾ＯＢで「もったいない倶楽部」をつくり、2008 年よりマーマレード作りに取り組む。

活動開始のきっかけ

教育委員会の主催事業への参加がきっかけ

現役時代より、60 歳になって余暇の過ごし方を考えても遅く、早めに準備して、充実した第二の人生を送りたいと思っていました。また、人が健康に暮らしていく上で「食」が最も重要だと考えていました。

こうした思いを持っていたときに、教育委員会主催の事業に「すぎなみ大人塾」という講座があり、「スローフードな地域づくり～地産地食」をテーマにしたコースが開催されることを知り、この大人塾に参加したことが、私が今行っている活動の原点となりました。このとき、私は 57 歳でした。参加者は 30 名ほどで、女性が 9 割を占めていました。

講座が終了し、6 ヶ月後、教育委員会が「スローフードな地域づくり～地産地食」のフォローアップのために、有志で集まる場を設けました。ＯＢ・ＯＧたちが約 15 人集まり、学んできたことを振り返るとともに、「食」と「農」をテーマにした今後の活動として何ができるかを話し合いました。こうした話し合いなどには、教育委員会から無償で会場が提供されました。メンバーの話し合いの中で、「公園や民家でほったらかしになっている夏みかんは、実っているのに手がつけられていなくてもったいないし、道端におちて汚いね」というつぶやきが出ました。そのつぶやきに一同賛同し、マーマレード作りに発展しました。この地域では夏みかんを庭に植えているお宅が多く、マーマレード作りは、地域性のあるテーマでもあり、かつ、資源の有効活用でもありました。

活動の内容

地域活動の一環として、大人塾ＯＢ仲間とマーマレード作り

マーマレード作りの最大の目的は、あまり活用されていない（捨てられている）夏みかんでも美味しいマーマレードができることを知っていただき、少しでも「もったいない！」意識を高めることです。

そこで、グループ名を「もったいない倶楽部」として活動することになりました。現在のメンバーは男性 3 名、女性 8 名の計 11 名で、女性の割合が多いグループです。

マーマレードを作る際には、都立農芸高等学校の先生にアドバイスをいただきました。また、私は自発的に夜間の専門学校へ通い調理師の免許を取得したので、その資格が活かされることになりました。

材料となる夏みかんを集めるために、夏みかんのあるお宅へ「突撃アタック」として依頼文書のポスティングを行います。昨年は 775 個（226 kg）の夏みかんを提供していただきました。いただいたお宅には、お礼としてできたてのマーマレードを差し上げており、大変喜ばれています。

マーマレード作りは営利目的ではないのですが、「マーマレードをもっと食べたい」という声を受けて、障害者の就労を支援する「どんまい福祉工房」の方々と連携して、工房が作るパンやケーキにマーマレードを練り込んで販売することを始めました。さらに、昨年からは、工房の要望でマーマレードの瓶詰めも販売することになりました。

活動のやりがい

地域活動により充実した生活が実現

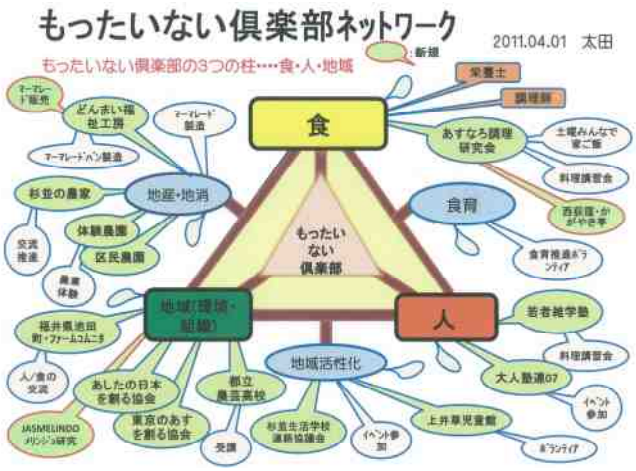
40 年近くサラリーマン生活を送ってきたので、地域活動の「ビジネスライク」でないところに面白さとやりがいを感じています。また、「退職後の人生において地域貢献ができている」という喜びを日々かみしめています。現役時代に思い描いていた、「ただ生きるためではなく、充実した生活を送りたい」という目標が実現しつつあるのを感じています。

周囲との関わり

もったいない倶楽部のネットワーク

もったいない倶楽部は、様々な組織と連携することによって、活動の幅をどんどん広げています。

その一例が、福井県池田町との交流や、「西荻まちレストラン・かがやき亭」でのお年寄りを中心に食事を提供する活動です。私は、かがやき亭に木、金、土曜日の週 3 日通い、ランチを調理しています。



直面した課題と解決方法

女性が約 8 割。職場の経験を生かして調整を図る

平成 19 年から活動を続ける中で、やはり意見が衝突することがあります。もったいない倶楽部のメンバーは、女性が約 8 割を占めているのですが、意見が衝突したとき、言いたいことが言えずに、重い雰囲気になることがあります。

そのようなときこそ、会社組織で培われた経験が役立ちます。職場では、日頃からグループの中での調整をとってきました。時には、グループを越えて組織間の調整役を担うこともありました。そうした経験があったので、私は、もったいない倶楽部において、率先してメンバー間の調整役を買って出るとともに、組織間の調整役も積極的に引き受け、ネットワークの幅を広げてきました。今では非常に良い関係が築かれていると自負しています。

また、私はパワーポイントやエクセルを使っての資料づくりを率先して行うなど、現役時代の経験を今の地域活動に生かすようにしています。

これからの展望

マーマレード作りを通して地域交流を促進させる

地域の民家から夏みかんを提供していただき、それをマーマレードとしてお返しする。これは、民家ともったいない倶楽部との、点と点の活動のように見えますが、実は、点が次第に地域に広がっていることを最近実感するようになりました。我々の活動に共感していただいたお宅からは、毎年季節になると「夏みかんを提供しましょうか」とか「まだ取りに来ないのですか」いう声がかかるようになり、地域とのつながりが形成されてきました。

「継続は力なり」、「無理をせず、できることをできる人ができるだけ」をモットーに、地域の交流をさらに広げていくため、マーマレード作りに取り組んでいきたいと思っています。

事例１０

キーワード：「子育て支援」「父親同士の交流」「新規団体設立」「行政との連携」

子育てパパ向けの大人気イベントを企画運営

活動地域（新潟県柏崎市）

男性のプロフィール

氏　　名：大掛　隆さん　　年齢層：若年層（20～30 歳代）

活動概要：「柏崎オヤジ倶楽部～ぱぱだって～」代表。子育て世代を対象としたイベント等を企画して、父親の子育ての支援に取り組む。ＰＴＡ役員としても活動し、男女共同参画の考え方を啓発。

活動開始のきっかけ

我が子を授かり、父親の子育てに関心。市からの誘いを受け、活動を開始

私が父親の子育て支援に取り組むようになったそもそものきっかけは、今から約 10 年前の 30 歳のころ、子どもが生まれ、市内を歩いていると、男性が子どもをおぶったりしている光景が気になるようになり、「男性の育児参加」というのを現実問題として意識するようになったからです。その光景を見て、「自分も負けずに親バカになろう」と思いました。あとは、男性が育児をすると周囲から「えらいね」と褒められたりするので、「それもいいな」という気持ちもありました。

そのように思っていた時期に、市のかしわざき男女共同参画推進市民会議（以下、「市民会議」という）への入会の誘いを市から受けました。母が同会議のメンバーであった関係から私に声がかかり、その趣旨は「若い世代に男女共同参画の考え方を広めたい。その協力をしてほしい」というものでした。若年男性の育児参加に関心を持ち始めていたので、その趣旨に賛同し、市民会議への入会を決めました。

私が入会するまでは、市民会議が男女共同参画の事業として行っていたのは、40 歳代以上の参加者向けの講話会や勉強会が主でした。私は、父親の子育てに関心を持っていたので、子育て世代の父親を支援するイベントを新たに起こそうと、企画づくりに自ら取り組むようになりました。

活動の内容

子育てパパ向けのイベントを定期的に企画し、実施

「柏崎オヤジ倶楽部～ぱぱだって～」を男性メンバー3 名と立ち上げて、約 10 年にわたり、主に子育てパパ向けのイベントを定期的に実施しています。イベントは年 3 回ほど開催します。

特に、妻が出かけていても、子どもの面倒を見ながら簡単にできる料理をマスターすることを目的として、「父親だけの料理教室」や「父子での料理教室」を開催することが多くなっています。料理以外では、「父子と楽しむ七夕祭り」などがあります。

イベントの参加率は、募集 12 組に対し、応募が 84 組であるなど、非常に好評を得ています。父親にとって魅力ある内容にするために、内容面でも運営面でも工夫を凝らしており、こうしたことが評価される要因になっているのではないかと思います。参加者からの口コミで、新規応募者もどんどん増えています。

料理教室

七夕祭り

活動のやりがい

参加者の変化を目の当たりにするたびにやりがいを感じる

父子対象のイベントで特に感じるのですが、約3時間ほどのプログラムにも関わらず、イベントの開始時と終了時とで、父親も、子どもも、表情や態度が見違えるほど変化します。互いの距離がぐっと縮まっているのを見ると、「イベントをやって本当に良かった」とやりがいを感じます。

プログラムの中に、子どもから父親を褒める時間や、父親から子どもを褒める時間を設けるなど、仲を深めてもらう小さな仕掛けを数多くちりばめていることもあってか、参加者の劇的な変化が見られます。

父子で手をにぎりながら、にこにこ笑顔で家に帰っていく姿を見送っているとき、なんともいえない感覚を味わっています。

周囲との関わり

世代を超えたメンバーとの交流が大切

市民会議のメンバーには、50～60歳代の方がいて、この方々から子育てを含め、地域活動を進める上で様々なことを勉強させていただいています。この年代の方は子育て経験者が多く、既に子育てを終えて余裕のある方々です。対照的に、自分も含めて30～40歳代は、まさに子育ての真っ最中で、子育てに余裕がありません。父親の子育て支援を行っていく上で、ベテランの父親からの助けは非常に大きいと感じています。

直面した課題と解決方法

軌道に乗るまでは一苦労。しかし、今では応募者が殺到する人気イベントに

「柏崎オヤジ倶楽部～ぱぱだって～」を設立後、実際にイベントを企画しようと思ったとき、最初は何から手を付けたらよいかわかりませんでした。このため、第1回目は手探り状態で、保育園の園長を招いて、子どもとの接し方や子どもの笑顔の引き出し方などのレクチャーを受けるという内容で開催しました。しかし、参加者の中から、「もっと楽しめるといいね」、「お酒のおつまみを作れるようになるといいね」といった声が上がったことから、イベントの内容を「料理教室」にシフトさせていきました。すると、参加者から高い評価を得て、今では応募者が殺到するほどの人気のイベントになりました。参加者の声を大切にしながら、イベントの内容を適宜、更新していったことが良かったと思っています。

応募者が殺到するために、落選者を出さざるを得ないことが、今、一番心を痛めている課題です。イベントの開催回数を増やせば対処できるかもしれませんが、ボランティアとして行っている活動なので費用の面からも回数の増加は難しいのが実情です。短期的な解決策は見出せていませんが、この活動を長く継続して行っていくことで、より多くの父親に参加の機会を増やしていければと考えています。

これからの展望

ＰＴＡ会長として、父母で学校行事に参加できる体制づくりに挑戦したい

平成24年4月から、小学校のＰＴＡ会長を引き受けることになりました。学校行事のときに、父親も母親も両方が行事に参加できるように、小学校に「保育ルーム」の設置を働きかけていければと考えています。参観日に行きたいけれど、未就学児がいるからあきらめる人が多くいますが、我が子の成長は一瞬、一瞬で変わるものです。その一瞬を見逃さないための手助けをすることが私の夢です。当然、自分一人では実現することはできないので、国などの助成などを得られるように働きかけていければと考えています。

事例１１

キーワード：「若者の交流」「まちづくり」「新規団体設立」「公民館との連携」「イベント」

参画型イベントで、若者を地域活動に巻き込む

活動地域（福井県小浜市）

男性のプロフィール

氏　　名：柴田　淳史さん　　年齢層：若年層（20～30 歳代）

活動概要：公民館活動の一環として平成 22 年 4 月に地区の若者を集め、今富青年会「楽郷（らくごう）」を立ち上げる。ペットボトルツリーの作成など、年間を通して様々な活動を展開。26 歳。

活動開始のきっかけ

若者世代の地域活動の参加の低さに危機感

今から 3 年ほど前、私は地元の公民館（今富公民館）に勤務しており、職員同士で、若年層が公民館を利用する機会を増やせないかと話し合うことがありました。30 歳以上になると世帯を持つようになり、子どもとの関係から公民館を利用する頻度が増えてくるのですが、自分と同世代の 20 歳代はほとんど公民館を利用することがありませんでした。若年層が公民館を利用する機会を作るために、「講座」などを考えたのですが、実現には至りませんでした。

この職場での話し合いをきっかけに、「自分に何かできないだろうか」と日頃から考えるようになりました。ただ、1 人で考えていてもアイデアは膨らみません。同級生の知人男性に声をかけて、2 人で、若者を巻き込む地域活動を実現するための対策を練りました。特に、我々が不安を感じていたのは、若い世代が高齢者になったとき、今の高齢者の方々が行っているような子どもの送り迎えボランティアなど、地域貢献のための活動ができるだろうか、ということでした。若い世代が高齢者になった時に、助け合いのできない地域になって困るのは自分たちです。その時に備えて、今のうちから若者が団結して取り組めるような活動を作って、地域を守れる人づくりをしたいという思いがありました。

色々考えた結果、若年層を地域に引き出すためには、若者中心の組織を作って、その組織を介して具体的な活動を実践していくのが効果的ではないかと考え、今富青年会「楽郷」を立ち上げることを決めたのです。大学や就職を機に県外に出る人が多いので、メンバー集めには苦労しましたが、何とか 10 名程度を集めて平成 22 年 4 月に発足が実現。「楽郷」としての地域活動が始まりました。

活動の内容

若者を始め、住民たちと一緒に作り上げるイベントを企画・運営

今富青年会「楽郷」のモットーは、「自分たちがやりたいこと、楽しいことをやろう」です。他県の地域活動の先進事例をインターネットで収集して、我が地域でできることを探しました。そこで見つけたものの一つが、ペットボトルツリーでした。

若者を中心に、お年寄りや日頃公民館を利用される方々に呼びかけて、地域総動員で約 3 ヶ月をかけて、ペットボトルツリーを製作します。例年、総勢 150 名を超える方々の協力が得られています。ペットボトル集めから洗浄、そして 6m の鉄柱に三角錐状にしたペットボトル 3, 000～5, 000 本を取り付けて飾る作業を住民の手で行います。

田んぼアートなどのイベントも年に数回開催しています。

活動のやりがい

周囲の支援が心の支えに

活動を始めたころは不安ばかりで失敗もありましたが、その都度、公民館の手助けが得られたので、恵まれた環境で活動が進めてこれたと感じています。

活動をしようと思った時、一人では困難を乗り切れないことが多いと思います。そんなとき、自分が信頼できる誰かと一緒に始めてみると、思いのほかうまくいくということが、自分自身の経験からも実感できました。職場や友人に頼って、助けてもらったり、アドバイスをもらったりしながら活動にチャレンジしてみると、大半のことは成し遂げられるのではないかと思います。

周囲との関わり

友人、公民館の協力があってこそ地域活動ができた

「楽郷」の立ち上げ時から、ともに活動に取り組んできた友人の存在は非常に大きいです。

また、公民館からも、イベント企画時のアドバイスやイベント開催時の人集めなど、数多くの支援・協力をいただきました。当初、イベントを企画していたとき、我々は他県で行われている芸術性の高いペットボトルツリーや田んぼアートに憧れを抱き、それを当地区に、そのままあてはめようとしました。しかし、経験不足や環境の違いなどから思うように進めることができず、悩んだ時期がありました。そのような時、公民館の館長や職員から、「大きな目標を立てるのはいいけれど、いきなりは無理で、物事を前に進めるには順序がある。1年、1年と活動を継続するたびに、どんどん良くなっていけばいい」とのアドバイスをもらいました。こうしたアドバイスは我々にとって貴重で、励みにもなりました。

直面した課題と解決方法

転職により活動継続が困難に。しかし、公民館が全面的にサポート

私は昨年、公民館を退職し、異なる業種に転職しました。仕事との両立が難しく、従来のように密に地域活動に関わることが難しくなってきました。また、「楽郷」のメンバーとも定期的に話し合う機会が少なくなりつつありました。

このため、「楽郷」がこれまで実行してきたペットボトルツリーなどのイベントの継続が危ぶまれたのですが、公民館が、公民館活動の一環としてイベントを続けてくれました。私たちも事前準備や当日の運営などで参加はしたのですが、ペットボトルツリーを例年通り開催できたのは、公民館の全面的なサポートがあってこそと感謝しています。

これからの展望

地域活動に参加する若者を増やしたい

平成 23 年度は「楽郷」の活動を十分行えなかったと反省しています。このため、新年度早々、メンバーで集まり、これからのプランを練りたいと考えています。特に、これまでなかなか実現できなかった「若者だけのスポーツ大会」などを形にしてきたいと考えています。

活動を進めてきて感じるのは、地域の中に飛び込んで活動を実践する中で、幅広い年代の方々に自分の存在を知ってもらえるようになったことです。これにより、地域の方が若者を必要とする場面で、「この前、柴田君と一緒にいたあの若者も誘って、うちの行事を手伝ってくれないか」という感じで私に声がかかるようになりました。そして、実際に自分以外の若者が地域の行事を手伝っている光景をよく目にするようになりました。若者の地域活動への参加が増えつつあるのは、活動の成果の一つであると思います。今後も、地域のために、地域活動に参加する若者をさらに増やしていきたいと思います。